

幼稚園は何をするとところか ②

津 守 真



前回、本誌の十月号で、同じ題で書いて以来、幼児教育の基礎をどこに求めたらよいのかについて、いろいろと考えながら検討しているうちに日を過ぎてしまった。考えていると理屈の上からは、幼児期にこんなものを与えたらよからう、こんなこともくみこんでおかなければ、ということがいくつも出てくる。しかし、幼児保育の基礎としては、こんなものを与えることが望ましいというだけでは不十分なのである。なぜ望ましいかということを道徳的な観点や、おとなの社会規準からだけ考えるのでは幼児保育を実際に行なってゆく上の指針とはならない。目標がいかによくて、それが子どもの状態に適切でなければ、その目標は子どもと無縁のものである。子どもをどのよ

うな場面におけばどのような状態になり、どのようなことができるのかということを見ることは、教育の上できわめて重要と言わねばならない。それによって、教育は形式的なものにもなり、また子どもの内面にまで入ってゆくものともなるのである。だから、幼児の状態をよく観察するところから、幼児に必要なものを与えることが必要だということが出てくる。幼児の生活は、単調で平板な直線のようなものではない。それはむしろ各処に起伏のある曲線のようなものである。それぞれの時期によって重心は変化し、その時に幼児の必要とするものは変わってゆくのである。いろいろの能力の発達に伴なって、幼児の吸収力も変化してゆく。このような生活の重心を捉えることなし

に、おとなが望ましいと考える目標を羅列してみても、それは幼児の生活とは関連のないものになってしまう。

幼児期の中心課題は何か

それでは、幼児期の生活の重心はどこにあるのか。幼児期に子どもの必要としているものは何であるのか。この問いに答えを出すには、幼児期の前後の時期をもふくめて、その発達過程を概観しなければならぬ。少しく当面の問題点を見失うことになりはしないかと恐れるが、幼児期の問題を明らかにするために、できるだけ簡略に、発達の各時期の重心の変化を示してみよう。

乳児期は授乳の生活が大きな問題である

乳児期の最初の時期には、乳児は目を覚ましている時間の大部分を乳を吸って過ごすので、授乳に関係する生活が乳児にとって最大の関心となる。目や耳の機能も十分に発達していない乳児にとって、乳を吸い、母親と肌をふれるということはほとんど唯一の外界との接触の通路であって、そこでどれだけ満足を得るかということが、乳児にとって大きな問題なのである。母親の腕の中で心ゆくまで乳を吸う経験を得ることによって、乳児は自分の力の充実感を体験し、また外の世界に対する信頼感を得てゆく。ここに乳児保育の第一の問題点がある。

乳児初期の遊び

授乳が最大の関心事である時期の生活の中に、外界の刺激を目と耳の感覚で楽しむ時間が挿入されてくる。みち足りた睡眠と授乳の後に、乳児はふと目に映る光、耳に響く音に気がつく。窓から射す日光の影、木の葉の動き、小鳥の囀り、台所から聞える物音、人の気配など、乳児は快く耳を傾け、影を追い、一人で声を出して楽しむのである。短時間ではあるけれども、ここに最初の遊びがある。乳児がこうして一人で外界の刺激を楽しむ生活の中に、おとなは足をふみこんではならないのである。外界の刺激にはおとなが意図的に統制できるものもあるし、できないものも多い。できるだけよい刺激を与えられるような環境をつくるのであるが、乳児が自分で発見してくれるものも多い。このような受動的な遊びの生活をめぐって、乳児保育の第二の問題点がある。

外界に対して積極的になる乳児

生後半年をすぎると、乳児は外の世界に積極的に進出してゆく。見たものに手をのばし、紙を破き、手あたり次第に掴み、ふりまわし、かきまわす。はっていつてさわわり、口にいれ、叩く。おとなの世界の中に進出してきて、おとなの生活の秩序を破るのである。おとなの生活の中で、触れられては困るもの、いたずらされるとやっかいなものでも見境いなしにかきまわ

す。おとなの側からの判断だけで、これを制限するならば、乳児は外の世界に対する積極的態度をそがれてしまう。外界に対する積極的探求心はこの時期に養われるのである。おとなは自己の生活の便宜的な秩序が破られることを覚悟し、子どもの生活をつくってゆくことに心を用いなければならぬのである。おとながつくってきた今までの生活の習慣は、子どもが積極的に進出する段階に達したときには訂正されて、子どもの積極的な生活を十分に確保するような共存の態勢につくりかえられてゆかなければならない。子どもと共にある生活は、常におとなにとつて柔軟心をもって適応することを要求するのである。ここに乳児保育の第三の問題点がある。

おとなに一しよにいてもらう生活

一、二才の幼児に共通な大きな特長、幼児の側から言えば大きな関心事は、母親に傍にいてもraitたいということであり、母親を独占したいということである。それはいつもではない。自分の遊びに没頭しているときには、自分の世界がある。しかしその合間に、母親を追い、母親に要求するということは、幼児前期の生活の重要な部分である。幼児はここで母親を信頼することを学ぶ。母親を信頼することのできる幼児は、その安心感に支えられて、積極的に外界に向かってゆくことができるようになる。すなわち、自立できるようになる。母親がいついな

くなるか分らない不安の中にいる幼児、母親にきいてもえないかもしれないという恐れの中にある幼児は、ある時はおとなに対して要求がましく、あるときは反抗的である。保育者との心の結びつきができているときに、幼児は外の世界を有効に学習することができるのである。これは幼児前期の保育でとくに問題となる点である。

ものをいじったり、ためしたり、他人のまねをしたりする

二、三才になると、幼児は次第にがむしゃらに外界に向かうのではなくて、ものの性質に適應して扱うようになる。箱のふたは箱の上のせ、電話の受話器は耳にあて、一枚の紙片を切符にしたり、お金にしたりする。砂は叩いたりこねたりし、積木は並べたり積んだりする。子どもはさまざまな材料をいじり、ためしながら、いろいろの扱い方を発見してゆくのである。子どもはこうした材料を扱って、その中で自分でものの扱い方を発見し、自分の能力を使ってゆく喜びを味わってゆく。これが幼児前期の遊びである。それはごく単純な扱い方から出発するので、おとなの眼にはしばしばまだるっこい。砂で遊べばすぐに山を作らせ、池を掘らせようというのがおとなの性急な考えである。だがしかし、一足とびにそんなことはしない。砂を叩き、ちらし、手でこね、シャベルでちらしてみ、指をつっこん高みて、そういう経験を重ねるうちに、穴ができたリ、少しで

く砂の重なりができたりする。時間をかけてその過程を経、子どもが自分で材料をつかいこなしてゆくのでなければ発展がない。くだらないと思うくらい単純な操作を、子どもは長時間かかってやっている。こんなものを、とおとながおせっかいをしたとたんに、遊びが止ってしまうことはしばしば経験するところである。二、三才になると、食べさせたり、排泄、着脱衣に要する時間と労力がだいぶ減少し、子ども自身にとっても、生理的要求をみたすことの重要性がずっと減ってくる。そして、ごたごたと遊んで過ごす時間が増し、遊びの満足が得られないと気むずかしくなることもある。子どもの幼い未熟な能力なりに、それを用いることに子どもは成就の喜びを感じるのである。このさまざまな能力を満してやるには、材料も必要だし、遊ぶ場所も重要である。そして、ゆっくりと遊ぶ時間を与えてやることは非常にたいせつである。幼児前期では、すでに、遊びの生活は子どもの生活の中心部を占めてくるのである。その遊びは、ものを相手とし、ひとりて遊ぶことが多いのであるが。

目標をもち友人と遊び、材料を総合的に用いて遊ぶ

—— 成就の喜びをもつ ——

三、四才になると、遊びの中に目標がはっきりしてくる。砂をつくっても、山を作ろうと意識して山をつくり、店屋に並べ

るためにおだんごをつくる。汽車を走らせるためにトンネルをつくるというように、行動が複雑になってくる。しかも幼児の場合には、一つの目標を達するとそれで終りではない。それは次の目標を生み、次の行動の始まりである。積木で自動車ができる、次にはそれがひこうきになり、また船になり、次から次へと変化してゆく。これは遊びそのものの中にある動的な力である。それを豊かにしてゆくものは、材料であり、友だちである。何種類もの材料がくみ合わされて一つの遊びになるのである。一種類の積木だけとか、砂だけというのでは遊びの範囲は限られてしまう。積木に椅子が加えられ、丸いものがあり、長いものがある、それは遊びに発展し、長時間継続する。砂場に丸太が加えられ、木の枝があり、水が加わって、砂場の中でいろいろな能力が総合して発揮される。最初の段階では単純な材料と単純な遊びで満足するが、その次の段階では、いろいろの材料が総合的に用いられ、多くの能力が発揮されない、幼児には食い足りない。けれども、しばしば、材料と機会とを与えられない幼児は、単純な遊びの段階だけで終ってしまう。これは幼児にとっては不満足なことである。

幼児の遊びの刺激となるもう一つの要素は、友人である。同年の友人がともに話しをしながら、ともに活動しながら、共通の興味につながって遊びは発展してゆく。最初の段階ではおと

な刺激が遊びのきっかけになり、友だちを結ぶ契機となることもあるが、じきにおとなは子どもの遊びについてゆけなくなってしまう。能力と関心を等しくする子ども同志は、お互いに遊びの素材になってゆくのである。

このように動的な遊びの中で幼児の發揮している能力は数え上げることができないほど多種多様である。運動能力も、構能力、思考力、数、ことばなどの知的能力も、友人と協調しあう社会的能力も、工夫力や想像力も、いろいろの能力がくみ合わされて發揮されている。どれか一つをとって、それを単独に訓練しようとしたら、とてもそれは不可能であろう。子どもはそれではついてこないし、またそれに要するおとなの側の労力はとてもたいへんであろう。単独にとり出して訓練できないようなことが、遊びの中で立派になしとげられているのである。しかも子どもはそのことを意識していない。子どもは遊びの中の目標を追求し、それを遂行して成しとげた喜びを味わうのみである。

このような遊びの生活が四、五、六才の幼児の生活の中心を占める部分である。幼児はこのような生活の中に生き甲斐を感じ、満足と喜びを味わっているのである。十分に遊べなかった日は、幼児にとっても不満足であり、それは食欲や睡眠にまで影響を与えるのである。おとなも、一日無為に過ごした日や、雑

用などで十分に仕事をしつくさなかった日は、気分的にもいら立ち、不満足であろう。それと同じことが幼児の遊びの生活についてあてはまる。おとなから与えられる課題はしばしば幼児にとっては雑用の部に入る。それもまたあってもよいであろう。しかし、生活の中心部はしっかりと確保した上でこのでなければならぬのである。おとなはそれがある程度自分で調整し、態度のもち方によって意味をかえてゆくことができる。しかし、幼児については、その生活の中心部を確保できるかどうかは、おとなの手にかかっているのです、おとながその中心部を確保するように、時間と環境と材料とを整えてやらなければならないのである。

知識の追求

五、六、七才になると、幼児の知的興味が次第に強くなる。図鑑を見ることを喜び、どういう構造か、どうしてそうなったのか、何が書いてあるか、というようなことに興味をもつ。しりとりをしたり、なぞなぞをしたりすることを好む。字をよんだり、書いたりすることに興味をもち、六、七才になると、自分で本をよむようになる。数に興味をもち、数えることを工夫する。このような知的な活動が、遊びの中に加わってくる。その知的活動の比重は、年齢の増加とともに次第に増してくる。そして子どもは知的能力を使うことに喜びを感じ、知識を追求

してゆくのである。この幼児後期においては、おとなに言われて知識に興味をもつのではない。それはもっと自発的なものであり、遊びと同じなのである。子どもの生活環境の中に、知的な能力に齒ごたえのあるような材料が次第にとりいれられてゆくことが必要なのである。各種の書物、自然物、道具など。

知的能力の発達は、これから児童期を通してめざましく、児童期の重要な課題となってくる。幼児が自然に遊びに成就欲求の満足を見出したように、児童は自然に、知識追求に成就の喜びを得る。それを破ってゆくのはむしろおとなの手なのであり、おとなの要求が少しずつ子どもの生活と齒車が合わないことよって、子どもの生活が満されないものになってゆくのである。

幼児にとって望ましい目標がいくつも考えられる。しかし、それは幼児の生活の中心的な関心にふれてはじめて意味をもってくる。ものを大切にすると言っても、子どもは自分が熱心に遊んだものには愛着をもち、それだからそれを大切にすることに幼児の生活の中の意味が生じてくる。あまりおもしろくなく、先生に言われてつくったものに対しては、感情的な愛着は生れない。大切にしましょうと言われても幼児に実感は湧かないのである。先生の言うことを注意してきくようにと言って

も、幼児は自分の関心の中心にふれることには注意せざるを得ないのである。生活と関連のないところで、ただたんに注意してきかせるしつけをしようとしても、表面的なことに終わってしまう。おとなでも自分の関心のない話はきこうとしないのである。幼児の生活の中心である遊びの中に入ってくるときに、すべてのは生き生きとしてくる。その中では友だちと考えが合わないことは身近にふれた問題である。友だちが遊具をかしてくれなくても、それでも自分はその子にものをかしてやれるかどうかということは身にふれた問題である。皆が集ったところで仲良くしましょう、親切にしましょうと何回言われても、それはことばとしては覚えても、子どもの生活の中には入ってこない。子どもの内面生活にはふれてこないのである。

以上に、幼稚園では、幼児の遊びの生活を十分に確保することとが、幼稚園にとって第一の課題であることを述べた。それは幼児期の発達に適切なことであり、その中ではじめて幼児は成就感をもつことができる。幼児は本当の自分をその中で見出すことができる。そして遊びの生活を確保し、それを発展させることこそ、能力の開発にとっても最良の方法である。そして遊びの生活の中で教育目標は具体的に生かされてくるのである。